

「長府御越一件」より萩藩当役国司備後書状（毛利家文庫6巡見事54）＊シート裏参照

## 萩藩主重就、領内巡見「はじめる」

(3)

### 《大殿時代の巡見》

天明3年(1783)5月、藩主の座を譲った重就は三田尻に隠居します。「大殿」重就は、亡くなる寛政元年(1789)10月までの6年半の間、18回もの巡見に出ています。以下、概要を紹介します。

#### ①天明5年「上ノ関・大島郡御歩行 一件諸沙汰」

天明5年2月～3月の9日間、上関から大島郡を巡見しています。

2月22日三田尻を発ち、途中、戸田村の光西寺、富田、櫛ヶ浜で休憩しながら下松西市に着き、本陣林彦右衛門宅で泊。翌日室積普賢寺に立ち寄った後、海路上関へ進み同所御茶屋に着。24日室津山で鹿狩りに興じ、25日上関から大島の小松開作へ渡海、陸路で久賀本陣へ着。26日久賀を発ち、途中狩りをしながら安下庄へ。本陣は中司喜左衛門宅。翌日は精進日のため狩りはせず散策

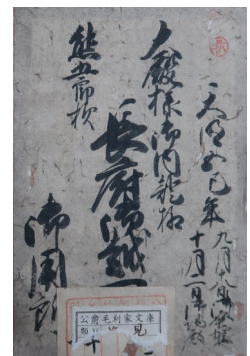
のみ。28日安下庄を発ち、狩りをしながら小松開作に戻り同所泊（本陣は矢田部左衛門、同幸介宅）。29日渡海し遠崎着、波野を通り下松西市本陣で泊、翌3月1日櫛ヶ浜から海路福川へと渡り、三田尻に戻りました。

船での移動を交え、上関から大島を巡った重就。狩りに興じ、春の瀬戸内海の風景を楽しんだことでしょう。

#### ②天明5年「長府御越一件」

天明5年9～10月、重就は疱瘡を患った長府藩主毛利匡芳（重就5男）の見舞いという名目で長府を訪れます。長府藩の強い要請によるものでした。側室（御内証様）と8男熊五郎が随伴しています。

9月18日三田尻を発った一行は小郡、吉田で1泊し、20日長府本陣着。21日長府御館で歓迎の宴が催されました。22日は相撲見物の予定が悪天候で中止。23日前田御茶屋へ移り、24日長府藩



処罰を許された子どもたち

天明5年10月2日長府から戻る重就一行が小郡宰判台道村岩淵を通った時のことです。百姓の子・三次郎と市松が一行の行列から見るところで馬に乗っていたことが問題視されました。失礼な振る舞いとされ、本来処罰されるところでしたが、「幼少者」ということでお咎め無しとなり、小郡代官にその旨が伝えられました（長府御越一件）。「慈悲深い大殿様」を領民にアピールできたことでしょう。

主匡芳とともに住吉神社に参詣。29日にかけて下関で鷹狩をしたり、阿弥陀寺・亀山八幡宮へ参詣しています。「岩見屋遊女共道中」も見ています。晦日帰路につき、吉田、小郡で1泊、10月2日に三田尻帰着。萩藩主を継いだ後、はじめての「里帰り」、15日間の旅でした。

### ③天明5年・8年「小郡行」

### ④天明8年・寛政元年「秋穂御越」

小郡や秋穂には鷹狩でたびたび出かけています。小郡は天明5年1月21～23日、同8年10月晦日～11月3日の2回、秋穂も天明8年1月15～18日、寛政元年(1789)1月21～24日の2回。「三田尻・小郡は場所も近く、大殿様は自身の鷹場のように思っておられる」（『三田尻御沙汰』上 P28）ともされ、お気に入りの手近な鷹場だったようです。

### ⑤天明5年「岐波・宇部御越控」

天明5年7月には岐波村・宇部にも出かけています。20日三田尻を船で発ち、丸尾崎（現宇部市）に上陸し岐波村（前同）へ。同所で狩りに興じ、22日宇部村へ。本陣は教念寺。同地でも狩りを楽しんだでしょう。24日三田尻に戻りました。なお、天明7年7月にも岐波・宇部での鷹狩が計画されましたが、激しい暑さのため中止されています。

### ⑥天明6年・寛政元年「都濃郡須々万御越一件」ほか

都濃郡須々万（現周南市）へも狩りに出ています。天明6年2月晦日三田尻を発ち福川経由で須々万へ。ところが、翌3月1日はあいにく雨で狩りができず、翌日三田尻に戻りました。3年後の寛政元年(1789)3月、須々万での狩りが実現します。14日三田尻を発ち前回同様福川経由で須々万へ。堀与兵衛宅が本陣でした。15・16日と猪狩りに興じ、17日三田尻に戻っています。

### ⑦「御出萩南苑御滞留諸沙汰控」ほか

萩へは天明5年・寛政元年を除き、毎年1度、三田尻から出向いています（出萩）。2月もしくは9月、多くは16～20日程度（もっとも長い時には24日間）、南園御茶屋に滞在しています。

### ⑧「湯田御湯治一件諸沙汰控」

山口は萩への行き帰りに1泊する場所ですが、湯治を兼ね山口にのみ出向いた例もあります。天明7年4月1日、小郡で狩りの後、山口へ行く計画でしたが、悪天候で小郡行きを中止、直接山口へ赴き10日まで滞在しました。翌8年も4月21～25日山口に滞在しています。

寛政元年4～5月の場合は22日間とかなり長期間山口に滞在しています。4月12日、8男熊五郎、側室（御内証様・新家様）を伴い山口へ。それから5月4日までの間、氷上山、多賀社、常栄寺、周慶寺などへ参詣、荒神山での猪狩り、平蓮寺での鷹狩、山口の子供踊りや吉敷芝居の見物、鰐石での蛸狩りなど、山口での長期滞在を楽しんだ様子がみとれます。重就にとってこれが最後の領内巡見になりました。半年後の10月7日、重就は三田尻で65才の生涯を閉じています。

### 《巡見する大殿重就》

大殿重就は、萩・山口・小郡のほか、上関・大島、長府・下関、須々万、秋穂、岐波・宇部など、より多くの場所に出向いている点が特徴です。藩主時代とは異なり、自らの鷹狩のため、あるいは、息子・娘・側室らを楽しませるため、という面が強いです。ただし、藩主治親に代わり、藩主家の威光を領内に示すという役割も十分果たしたことでしょう（コラム参照）。

◇重就の長府行きの際を記す萩藩当役国司備後書状（天明五年六月十九日、シート冒頭写真）

一筆令啓達候

大殿様長府被遊御出候様ニと此内

已来度々（長府藩主毛利重考）甲斐守様方御願被仰上

置候、然處御時節柄之儀随分

御手輕被仰付候而も御双方御造作

入之儀ニ付御断可被成との事ニて

（萩藩使者）小幡源兵衛長府被差越御断之趣

被仰入候処、至極御尤之御事被成

御承知候へ共、是迄も御出御延引

之段甚御氣毒被思召、何とそ被成

御出候様ニと猶又源兵衛を以重疊

被仰上候、源兵衛罷帰候而長府表之

御様子被聞召候處、此内方御家老

其外御用懸等被仰付、前田御茶屋

御滞留所ニ御取繕等も相成、其外

御用意も過半出来之由、再応被

被仰上候儀傍二而、御出可被成との御事

被仰出候（下略）

◆当役国司から当職佐世死ての書状です。長府藩主が重就の来藩を望んだことに対し、萩藩側は「双方の負担になるから」といった断りの使者を派遣しましたが、再度長府藩から強い要望があり（これまでも延期とされた）、結局重就も長府行きを決定したという経緯であったようです。